

■ 編集だより

編集後記

古いものが新しいものになる。採算や効率を求め進歩することは当然である。「進歩」とは、時間の経過とともにより良い状態に進むことであり、これを絶えず繰り返していくことで「進化」していく。その「進化」がくせ者である。環境に適したように変化することが求められているが、適応しようとしている環境が本当にわれわれにとって良いものであるのか改めて考えてみたい。

産業の分野では、消費者のニーズに合わせ、低いコストで速く、高品質の製品を作ることをめざしてきた。モノづくりは人から機械に移り、それに伴い、エネルギーは石炭から石油そして原子力に転換されてきている。確かに、製品を作るには上記の3つの条件を満たしており、一見よさそうである。

精神医学、特にうつ病の治療について言えば、病因仮説をセロトニン、ノルアドレナリン、ドパミンにターゲットに絞り、副作用を可能な限り削ぎ落としSSRI、SNRIが開発された。うつ病のみならず不安性障害はこれらの薬剤ですべて解決できると言わんばかりに用いられ、効果がないと他の薬剤にスイッチされる。精神科医のみならず、プライマリケアの医師も積極的にうつ病治療に参入するようになった。その結果、早期に介入が行われ、重症化するケースが少なくなり、入院治療まで至るケースが減少した。薬物療法によって、3分の2以上の患者らは何らかの恩恵を受けている。そして、薬物療法では太刀打ちできない残りの3分の1の患者に対しては、非薬物療法が試みられている。ただ、薬物療法よりも手間暇がかかるため、プチ精神療法と称して、簡便にできる工夫がなされている。

進化の過程において、ある方向性に傾きすぎたら、揺り戻しのような作用が働き、新たな方向へ進んでいく。その経過中に取り巻く環境が変わり、また新たな環境に相応するように進化の矛先を変える。つまり、進化と環境は切っても切り離せない関係である。

われわれは、これらの関係を野放しに、静観していてよいのであろうか。振り子のように行きつ戻りつしながら、正しい方向に向かっていくものであると信じたいが、時に悪循環に陥り、望まざる結末に向かっていく可能性がないとは限らない。

安価で高品質のものを短期間で作ることは、モノづくりの理想でありめざすところであるが、そのことによって失われるものがあることを忘れてはならない。

研究分野でも、EBMを重視することで、条件を揃え、標準化した尺度を用い、対象者の大規模化といった経過をたどりながら研究手法が進化してきた。現代医学ではメタ解析でなければ、人々は納得してくれない。科学は観察を通じて正確に認識することを基本としており、測定できないものについては、研究対象から除外される。しかし客観性に固執するあまり、全体を見失ってしまうことが危惧される。この進化の過程で大切なものが削ぎ落とされ、何か物足りなさを感じる。医師のためではなく患者のための研究であるという本来の目的を見失ってはいけない。患者は治ることを求めているのは当然であるが、治ることが難しい場合、医師と協働して治そうとする過程も重視している。削ぎ落され、対象から外された症状や患者に焦点を当てた研究が輩出されることを望む。

忽滑谷和孝